



アルゼンチン 白人社会の中、絆深める

多様な自然と生活水準の高さを誇るアルゼンチン。約6万人の日系人が暮らし、そのうち8割を沖縄県系が占めます。白人中心の社会で団結し、生活の基盤を築いていった県系人の歩みを紹介します。

アルゼンチン共和国

アルゼンチンデータ

- 首都: ブエノスアイレス
- 人口: 4494万人
- 面積: 278万km²
- 主な言語: スペイン語

●アサード
牛や豚の塊肉を炭火でじっくり焼くアルゼンチン版バーベキュー。アルゼンチンを代表する肉料理

●イグアスの悪魔の喉笛
ブラジルとの国境に位置するイグアス滝は世界三大瀑布の一つ。アルゼンチン側にある高さ80メートルの「悪魔の喉笛」は人気の観光スポット

●ペリト・モレノ氷河
南米大陸の南緯40度より南側、アルゼンチンとチリにまたがる雄大な自然が広がるパタゴニア。中でもアルゼンチン南端部のロスグラシアレス国立公園内のペリト・モレノ氷河は全長35%の巨大な氷河で、夏には先端の氷が崩落する姿を見ることが出来る

●マゼランペンギン
体長65~70センチ、体重4%の中型のペンギンで、南米大陸の南側の沿岸部にすむ。大西洋側の特別保護区ブスタントンポは一大生息地

●アルゼンチンタンゴ
19世紀半ばにブエノスアイレスの活気ある地区で生まれたダンス音楽。キューバやヨーロッパ、アフリカなどさまざまな国の音楽が混ざり合ってきた。街中では哀愁を帯びたメロディに合わせて踊る男女の姿がよく見られる

●アルファフォル
練乳を煮込んで作ったドゥルセ・デ・レचेをサンドしたアルファフォルは1日600万個も食べられるという国民的スイーツ

自然豊かな「世界の食糧庫」

南北の距離が約3700キロもある国で、中部は広大な平原・パンパ、西にアンデス山脈、南部のパタゴニアは寒冷な乾燥地帯が広がります。農業が盛んで「世界の食糧庫」と呼ばれています。紀元前から山岳地帯を中心に先住民が暮らしていました。16世紀、スペインに征服され、植

民地となります。1816年に、植民地生まれの白人が決起し独立。1862年にアルゼンチン共和国が成立します。その後、農作物の輸出国として有数の経済大国となりますが、世界恐慌で天不況に陥り、戦争や軍政で経済はさらに悪化しました。現在は政情、経済ともに安定しています。



シェスタで子どもも夜更かし

アルゼンチンは国土が南北に長く、温暖な亜熱帯林に砂漠、氷河が連なる寒冷地帯など、変化に富んだ自然豊かな国です。首都・ブエノスアイレスは「南米のバリ」と呼ばれる華やかな街で人口の4分の1が集中しています。東部に広がるパンパでは羊や牛の牧畜が盛んで、ガウチョと呼ばれるカウボーイが活躍します。「牛肉が主食」と言うほどよく食べ、その消費量は日本の5倍にもなります。伝統的に野菜はあまり食べず、代わりに「飲むサラダ」と呼ばれる栄養価の高いマテ茶を飲みます。

アルゼンチンでは幼稚園2年、小学校7年、中学校5年が義務教育で、公立学校は幼稚園から大学まで授業料が無料です。学校は午前と午後に分かれており、どちらか選んで通います。シェスタ(昼寝)の習慣があり、昼食後数時間休憩します。午後5時頃に軽食を食べる活動再開し、夕食は午後9時から11時頃。そのため子どもも夜遅くまで起きているのが一般的です。一番人気のスポーツはサッカー。マラドーナやメッシなどアルゼンチン出身の世界的な選手も多く、国民的英雄として尊敬されています。



県系人の歩み

洗濯業で生活基盤築く

19世紀後半以降、アルゼンチンでは労働力確保のために、ヨーロッパから移民を受け入れてきました。1908年に笠戸丸でブラジルに渡った移民の一部が転じたのが日本人移民の始まりです。その中には沖縄出身者もいました。正式に沖縄県の移民を受け入れたのは13年で、38年までに日本人移民全体の56%に当たる2754人が海を渡りました。アルゼンチンには契約移民制度はなく、全て自由移民だったため、親戚・知人の縁故をたどる「呼び寄せ」が主流でした。当時のアルゼンチンは生活水準が高く、すでにラテン系白人社会が形成されていました。農場での雇用は少なく、日本人移民の多くは都市部で家庭奉公やタクシー運転手、カフェの給仕などサービス業に就きました。20年頃には、洗

濯業、花の栽培、野菜の栽培が日本人移民の三大職業となります。特に洗濯業は、スペイン語が話せなくても仕事ができ、少ない資本で開業できたため、多くの沖縄出身者も従事しました。

第2次世界大戦が始まると、日本人移民は敵性国民として多くの国で弾圧を受けましたが、



経営するクリーニング店で作業する読谷村出身の比嘉憲英さん(1960年頃、アルゼンチン(読谷村提供))



アルゼンチンは対日感情が良く、迫害されることはありませんでした。終戦後の1948年、沖縄救済策の一環として、近親者によるアルゼンチンへの呼び寄せで33人が移住します。これを皮切りに沖縄の戦後移民が再開。48~93年までに3897人も県民がアルゼンチンに移りました。現在、日本人移民の8割は沖縄県系が占め、アルゼンチン社会の発展に寄与しています。戦前戦後を通し、県系1世は苦勞しながら生活基盤を固め、師弟の教育に力を入れました。県人の故郷への思いも強く、沖縄への留学経験がある若者で組織する沖留会を中心に、三線や空手など沖縄文化の継承発展に努めています。

ステキな先輩! 伝統の技 磨きたい

ブエノスアイレス出身・県系3世 佐久田アンドレスさん(45)

2019年、琉球古典芸能コンクール野村流音楽協会歌三線新人部門に合格した佐久田アンドレスさん(45)は那覇市。21年にはアルゼンチンカラーの三線を制作し、県工芸公募展の育成部門で新人賞に選ばれたなど、沖縄の伝統文化の継承に熱心に取り組んでいます。佐久田さんはブエノスアイレス出身。父方の祖父が浦添市、祖母が那覇市、母方の祖父が日勝連町出身の県系3世です。スペイン

語を話し、アルゼンチンの私立校に通うサッカーが大好きな少年でした。当時はそこまで県人会活動に熱心ではなく「あまり関係ない」と思っていたと振り返ります。マッサージ師として働いていた2011年、浦添市南米師弟研修で初めて沖縄を訪れました。沖縄の歴史や文化、人々の温かさに触れ、「自分の故郷はここだ」と強く感じたそうです。空手や三線、ウチナーグチなどを学んだ半年間の研

修後、アルゼンチンに戻りますが、沖縄への思いが募り、15年に那覇市の研修生として再来沖。16年の第6回世界のウチナーンチュ大会にも参加しました。「いつか沖縄に戻りたい」という願いをかなえ、17年に沖縄移住を果たします。沖縄で仕事を探し、本格的に三線と三線を学び始めました。仕事と稽古の両立は大変ですが、

「本場の沖縄でもっと技を磨きたかった」と力を込めます。今も動きながら稽古を続ける佐久田さん。今後は年老いた両親のことを考え、飛行機で直行便のあるスペインへの移住を考えています。「スペインでも空手と三線を続けたい。沖縄の若い人たちは、もっと沖縄の良さを知って発信してほしい」と呼び掛けました。



第54回琉球古典芸能コンクールで三線を奏でる佐久田アンドレスさん(2019年、那覇市の琉球新報ホール)

アルゼンチンの遊び パジャーナ

アルゼンチンで人気の遊びは「パジャーナ」。小石を使った身近な遊びで、子どもだけでなく大人同士でも楽しんでいます。簡単そうで奥が深いパジャーナを楽しみましょう★



準備するもの
小石やおはじきなど5個

遊び方は動画で

レベル1

石をばらまく

1つ拾って上に投げ、落ちてくる間に別の石を1つ拾って投げた石をキャッチ

また石を投げ、別の石を2こ拾い投げた石をキャッチ

拾う石を増やしていき、全て拾えたら成功!

レベル2

石をばらまく

1つ拾って上に投げ、落ちてくる間に別の石を1つ拾って投げた石をキャッチ

持っている石を全て投げ、落ちてくる間に別の石を1つ拾って投げた石を全てキャッチ

5つ落とさず拾えたら成功!

レベル3

石を5つ手ににぎる

1つ上に投げ、落ちてくる間に手に持っている石を1つ置き、投げた石をキャッチ

また1つ石を投げて落ちてくる間に手に持っている石を1つ置いて投げた石をキャッチ

全て置けたら成功!

協力 沖縄県立図書館、グラフィック作成・上原明子 (毎月第1週掲載)